

良人の貞操

吉屋信子

東方
社
版

おつと てい そう
良 人 の 貞 操

(乱丁・落丁の場合はお取替え致します)

昭和四十一年七月十日発行

定価三九〇円

著 者 吉 屋 信 子

発 行 者 石 渡 磨 須 子

整 版 者 内 田 柳 次 郎

発 行 所 東 京 都 文 京 区 高 田 豊 川 町 六 〇
東 方 社

振替東京五七七四番
電話(九段)四四五一〜四番

(印刷・邦文堂印刷所)

長編小説

良人の貞操

吉屋信子

長編 良人の貞操

朝餉の妻

出勤の良人

電報の来る日

若い環境

秋扇譜

生活の河

血縁

春日抄

青葉の頃

夏姿

秋ふたゝび

110 90 72 55 47 34 22 17 12 9 7

冬	薄	粉	そ	女	母	冬	月	人	海	エ	
鷺	氷	雪	れ	性	の	の	か	妻	上	ピ	
		の	か	の			ら	浄	日	ロ	
			ら	負	手	蠅	た	土	記	ー	
				担			男			グ	
											あ
											と
											が
											き

259 257 250 246 227 220 214 191 165 144 133 122

裝幀 上 原 繁 二

良人の貞操

朝餉の妻

一

お手製の白ネルの小さい袋の口に、針金を縫い付けた柄を持つて、邦子は瀬戸引きの珈琲沸しからドクドクとその袋へ、ジャバとモカを半々に張いた粉を含んで、ドロリとしたのを注ぐと、袋のネル地に滲されたのが、チョコボチョコボと下の珈琲碗に湯気を立てゝ溜つてゆく。

やつと一杯になると、自分の分は後廻しにして、牛乳入れと砂糖壺を揃えて、卓袱台に置いたとたん、向うの部屋から、「おい」

と信也の呼ぶ声がした。婚約中と新婚後、暫くは、「邦子さん」だったのが、「邦子」に変わり、四年後の今では、「おい」に下落した呼び声だった。

「な、ですの？」

邦子も朝餉支度の途中度々呼ばれるのは、苦手ゆえ、とても「貴方なあに？」など、生優しく甘い声など出す暇はなかった。

「ちよつと来て呉れ」

信也は又呼び付けた。手をのばせば直ぐ取れる紙屑籠一つでも、妻に来て取つて貰う良人の物臭太郎に慣らされた邦子は、火鉢の上の金網のパンを気にしながらも、そゝくさと立

ち上つた。

襖さわに、邦子の簞笥と並んだ洋服簞笥の戸を開け放つて、足は靴下釣を見せたまゝ、ワイシャツにネクタイを結びかけ、洋服簞笥の戸の裏の填込み鏡を見詰めながら信也は、

「此の間出したクリーニング出来て来ているかい？」

夏の麻の服の着更用の薄茶色の方を、先週洗濯屋へ出したのだった。

「え、もう来てますわ、でも、又あれお召しになるの？」

「うん」

ネクタイを結び終つた信也は、その服が出るのを待つ姿勢だった。

「だつて、折角綺麗になつて来たの、もつたないわ、もう夏もおしまいよ、御辛抱なさいよ、まだこれ、そんなに汚れてなんか居ないじゃないですか」

邦子は、信也が昨日まで着て出勤した白い麻の服を洋服掛からはずして突き付けるようにした。

だが見向きもせず、

「いゝから、洗つたの出して呉れ」

と高圧的だった。

「おしやれねえ、いつたい誰にお見せになるの」

邦子は、いさゝか、ふくれて見せて、押入から、ちゃんとナフタリンまで入れて、いつたん箱に納めた薄茶の夏服を取り出した。

「おい、むやみと小さく畳んじや駄目じやないか、よけいな

折目を付けて」

信也はズボンの中程に、横に畳目の付いたのを見て舌打ちした。

「だって、来年までいらなと思つたんですもの——アイロソかけますわ、少し待つて下さる？」

信也は、それには答えず、不機嫌に無言で、ぱつとそのズボンを畳に落すと、邪慳に古い白地の方のを引き取つて、着初めた。

邦子は、その良人の様子を手持無沙汰で見っていたが、これも又無言で茶の間へ引き返すと、火鉢の上のパンは、黒煙をあげていた。

「大変々々」

慌てゝ、取り上げて指先ではたいだが、片側が黒く焦げて、そつくり返り、ガリ／＼だった。

二

邦子が新にパンを切つているところへ、服を着終つた信也が足音荒く入つて来て、卓袱台の前で珈琲を掻き混ぜ、ひと口含むなりベツと吐き出す真似をした。

「よくも、こうまで、まずい珈琲を淹れられたもんだなあ、君はその点確に天才だよ」

と、ガチャリと珈琲碗を置いた。

「だって、さめてしまつたから、まずいのよ」

邦子も抗弁せずにいられなかつた。

「熱くつても、冷たくなつても、うまい、まずいは同じだよ、第一君は、たゞの一日だって、同じ調子に珈琲が出せた日はないぜ、薄かつたり濃かつたり苦かつたり、酸っぱかつたり——」

「仕方が無いわ、私機械じやないんですもの、そう一分一厘違わず毎日同じに出来ないわ」

「機械じやない——何を言うんだ、そんならもつと知恵のある人間らしく、珈琲の淹れ方ぐらい研究したらどうだ」

「勿論目下研究中よ、だからいろ／＼にして試しているんじゃないやありませんか」

「その御研究中に、僕の胃袋はどうになつてしまふよ、もう研究は願ひ下げだ。明日から、いさぎよく味噌汁と香物に還元してくれ、それが無事安全だ、朝の珈琲なんてものは、僕が次の世に生れ変つて、もう少し惻かな女房を持つまで生涯諦めたよ」

信也はそう言つて、まだ焼けぬパンを、ちぎつてネチ／＼とまづそうに嚙むのである。

邦子は、それを横から睨んで、

「何も、生涯諦める事なんてないわ。私、なんなら離縁してあげてもいいわ。そして珈琲淹れるのお上手な奥さんを幾人でもお持ちなさいまし」

「幾人もなんて要らん、一人でたくさんだ」

「駄目よ、貴方みたいな気難かしい人、一人じや背負ひ切れないわ、珈琲係、服係、御機嫌係、たくさんいることよ」

「莫迦を言え、奥さんなんてものは、もう一人で懲りごりだ」

信也は、顔を皺めて、まづい珈琲を一息ぐつと飲み込むと、もう立ち上りざま、傍に揃えてあつた二つの新聞の一つを持つて、玄關へすたくと出て行く。

その後を追つて、邦子が送ると、信也は、沓脱ぎの上を見て、舌打して、

「チェッ、もう九月だのに、白靴履く奴がいるか、茶革の出せよ」

「そう、でもあれ工場で油がこびり付いて、なか／＼落ちないで、まだそのまゝよ」

邦子は、まごついて、下駄箱を開けて出した茶革の靴は、信也が技師を勤めている工場の魚油の揚げ場の流れに濡れた痕が、黒く汚れていた。

「だから、女中でも何んでも置けつてんだ、自分じや靴ひとつ磨いても置けない癖に、莫迦ッ」

信也は、ぶり／＼して白靴を仕方なげに履き、格子戸を逆戻りするほど、びしやつと閉めて門を出た。その狭い門までの敷石の両側に群がつて、秋海棠が小鳥の嘴めいた薄紅い茎をのばして可愛い蕾を、もう見せている。

邦子は割烹着の上ツ張りの胸元で、両手の指をからみ合せて、しよんぼりして、今白服の長身の姿の良人が振り向きもせず、不機嫌な横顔で門前の小路へ曲つて行くのを見詰めていた。

今日も残暑の陽が烈しいらしく、その小路のあたり、キラキラと照りつけていた。

出勤の良人

一

信也は上野桜木町の我家を出ると、じきの美術学校の校舎の向い合う道を通つて、その角の京成電車（博物館動物園）の乗場へ入った。

勤先の同僚は、たいてい工場附近の尾久に便宜上住まつているが、彼はその新開地を避けて、桜木町に結婚当時から、ずつと棲んでいるのだつた。朝夕上野の森の奥から、桜や柳の古木の多い美術学校、音楽学校、図書館などの近くを歩いて、石の円柱を品よく立てゝ感じのよい、その京成電車の乗場から行き帰りするのを、生活の一つの潤いとして喜ぶ彼だつた。

そこから四つ目の町屋の駅で王子電車に乘換えるまでの途中を、信也は朝持つて出た新聞に眼を通す習慣だつた。

その日も信也が、ばらりと新聞を開いて、ざつと読んで行くくと、その家庭欄に、「亜米利加女性氣質の良人十戒」という見出しで、紐育のカレッジの女生徒達が結婚後良人に望む十カ条の希望が報じてあつた。

第一条。家事に就いては妻の絶対権を認める事。

第二条。妻の料理は完全無欠と信じて食する事。

第三条。自分の妻は地球上で最上の美人なりと信する事。

信也は、そこを読みながら、いかにも亜米利加の女らしい身勝手な言い分に、「フ、ハ、ハ」と微笑しながら、次の第四カ条へ眼を続けると、

良人は朝は必ず朗かに妻に対する事。（朝の良人の洪面は妻の一日を台なしにする）

と、あつた。信也はいきなり、ばさりと平手で新聞を叩いて、幾つにも畳んでしまつた。

だが、どうも妻の邦子の顔が眼先にちらついて来て仕方がなかつた。

（なるほど、そうかなあ）と思つて、妙な氣になつた。邦子が十年計画で自分の家を建てるという相談をしてから、女中を雇して（もつとも、新婚当座置いた女中が、次から次へよからぬ成績だつたせいもあるが）、万事経済を旨として、あれでも努力しているのだし、むやみと服のクリーニング代を節約したがつたり、珈琲の淹れ方も不十分だつたり、靴もあゝいう始末で、無神経なのは困るが、さりとて何も、叱り飛ばして小言ばかり言い立てるのも、ちと可哀相だつたかな、まつたく今日一日、しよんぼりして、家に一人で閉じ籠つてゐるのだらう——そう考えると、信也は妻が憐れまれた。

彼は乗換えた電車の中でも、腕組みして、何か懨然としていた。

間もなく尾久の熊野前で、信也は降りた。その線路の直ぐ

前に、荒川郵便局の建物がある。いつもは、そこを足早に通る過ぎる彼が、ふと立ち止つた。二三秒一寸考え込んだが、ついと局の内へ入つた。

彼は電報受付口の前で、頼信紙にシャーペンを取つて字を書き初めた。

ケサハユルセ イゴキヲツケヨ

それで、十五字丁度一音信に収まつたから、名は記さずとも、邦子にはわかると思つた。

信也は、それを受付口に差し出した。局員が事務的に文句と宛名を音読した。「えゝと——ケサハユルセ イゴキヲツケヨ……シタヤク、ウエノサクラキチヨウ……」

信也は慌てゝテレで、一音信の切手を添えると、逃げ出した。

その局を出て、線路を横切り、右手の舗道へ抜けると、その向うの空に、信也の勤める東洋電化工業株式会社工場の大きな煙突が聳えて見えるのだつた。

二

邦子は信也が出た後は、残つた珈琲もパンも味気なく惨澹とした氣持で、片付けるのもいやだつた。

女学校卒業の頃は、上の学校へ進むつもりで力んでいたのに、娘が結婚するまでは、安心出来ぬ親の焦慮から、信也と結婚させられた、と言つて、見合の時から、邦子は信也を好ましく感じたほどだから、無理に嫁がせられた訳ではなかつ

た。

だから勿論今でも信也を、悪い良人などとは夢にも思いはしなかつた。でもその代り、結婚生活というものには時々悲観させられた。

男には結婚してもしないでも、社会だの国家だの、やれ人類だのと論じたり考えたりする余裕があるのに、女はいったん結婚したら最後、宇宙も国家も社会も全人類も消え失せて、たゞ一にも良人、二にも良人だけとなり、良人を喜ばせ仕^{つか}える為にの、台所と鏡の前だけが、その全世界となつてしまうという事実を、邦子はこの足かけ四年間身をもつて体験したからだつた。

(女つて、みんな、これでいゝのかしら?)と、折々は首をひねつて見ても、さて、そんならどうすればいゝのかという解決は、わからなかつた。

そんなら自分は、どうすればいゝのか、何を良人に要求すればいゝのか、それはわからない——でも、昔も今も変りなく、(主婦)と言う体裁のいゝ名が、実は良人の万年女中に毛の生えた實在に過ぎないような情なさで、度々背と胸につかえる時があつた。

今朝も、運悪くその悲哀を味わされた気がした。

邦子はしよげて、台所で洗いのをし、家うちの掃除を元氣なく終つて、やつと割烹着を脱いた、その時、玄関で、

「水上さん、電報!」

と呼ぶ声がした。邦子は、はつとした。電報というものは、

普通の場合たいい凶事を思わせるものだつたから、邦子も、もしや鎌倉の父がどうかしたのかと、その刹那胸が轟いた。その父は昨年軽度の脳溢血を起して以来、寝たり起きたりしているのだつた。

そゝくさと出て受け取つた電報は、信也へ宛てたものだつた。開くと、

タミヲサクヤキユウビヨウニテシス」カヨ

「えつ!」邦子は胸を突かれて驚いた。

民郎とは、信也の従兄弟だつた。信也は幼くて両親を失ひ、北海道帯広市の伯父に養われた、その伯父の次男が民郎で、信也とは同い年齢で兄弟同様に育つた。

その縁で邦子は、自分の女学校の同級生だつた加代を、信也と二人で媒^{ばい}約して民郎と結婚させたのだつた。邦子は、まだ母にならぬに、加代は結婚後じき女の児を持つた。

良人同士は兄弟みたいなものだし、妻同士は学校友達で、媒約までした仲なので、この二夫婦は一番親しい親類づきあいだつた。たゞ住む処は遠く離れていた。東京と九州とに——民郎夫婦は、福岡の炭坑の社宅に結婚以來いたのである。

その民郎が、突然亡くなつたとは——電文には、別に来て呉れとは書いてないが、これはともかく信也が馳け付けて行かねばならぬ筈だと、邦子は判断した。

彼女は玄関と勝手口へだけ戸締りをして、近くの街通りの公衆電話へ駆け出すようにした。

それと、行違ひに、暫くすると又電報配達夫の赤い自転車

が、邦子の留守の門の前へ止つた。

電報の来る日

公衆電話のボックスは人で塞が^{ふさ}がつていた。外にも一人次の順番を待つ人が立つている。邦子は、その後を待つ余裕が持てなかつた。

なんなら、近くの顔見知りの店先で、電話を借りる手もあったが、——これまでも何かの時、工場へ電話をかけても、信也は工場内にいたり研究所にいたりまち／＼で、探し出して電話口へ出て貰うまでが大変だつたのを思うと、いつその事自分で電報を持つて行つた方が確かだと邦子は考えなおして、心もそらに家へ引き返した。

万一、信也が時間の都合で、工場からすぐ東京駅へ立つても、困らぬようにとも気づかつて、大急ぎで、今朝良人に着せ惜しんだ薄茶の服のズボンに、ざつとアイロンをかけ、あの茶革の靴も磨き上げて、髯剃りの安全剃刀、歯磨き、タオルまで入れた小型の鞆一つに納めると、大車輪で家の戸締りをし、火鉢の炭火を灰に埋めて、慌てふためいて、桜木町の家を出て、円タクをひろつた。

「尾久の東洋電化の工場知つてる？」

と運転手に念を押すと、

「さあ、あの辺工場がたくさんあるから、行けばわかりまさあ」

と答えた。邦子も結婚以来、初めて良人の勤め先の、その工場へ行くのだつた。

やがて見知らぬ町の広い白けた鋪道へ車が入つて行くと、邦子は心細げに窓からあちこちを見廻した。荒川の流に添う、工場地帯の倉庫や煙突が見え出すと、邦子は運転手より早く東洋電化の門を見つけた。

「此処よ、こゝよ」

車を止めさせて降りると、邦子は一寸身づくろいした。鞆などをさげて、その門を入るのが、きまり悪かつた。

門柱脇の門衛の控え窓の口で、邦子は、はにかみながら、

「あのオ、こちらの水上の——」

と言いかけて「妻」というのはおかしいと思つた、二年前亡くなつた実家の母親を、父がよく、

「家内が」と人に言つたのを瞬間思ひ出して、

「水上の家内でございますが、一寸急用が出来まして……」

と言つた。家内などと言つたら、自分がまるで五十か六十のお婆さんになつたような気がした。

「——入つて左手に事務所がありますから、其処へ——」

門衛は無表情で、でも丁寧な左の方を指さして、邦子の行くのを見届けるようにした。

行く手の広場の周囲に、別棟の幾つもの鉄筋コンクリートの工場の高い建物を背景に、門からの幅広い通路の両側に、木

造の二階建があつた。

邦子は勝手のおからぬ怯けを感じつゝ、教えられた通り、その左手の入口に入つた。フェルトの草履は脱いだものゝ、スリッパは無いので、そのまゝ足袋に廊下を踏んで上つて、きよろ／＼すると、すぐ傍が広い事務室で、硝子戸から丸見えで幾列も並んだ卓子に向い合せて、皆上着を取つてワイシヤツの袖を捲り上げた人達が、書いたり話したりしていた。その隅には、洋装の若い女事務員も二三人見えた。

受付つて、無いのかしらと、うろ／＼すると、廊下に向つた硝子戸が開いて、鶯色の上ツ張りを着物の上に付けた少女給仕らしいのが顔を覗かせた。邦子はそこで、もう一度「家内」という言葉を使った。

鶯色の上ツ張りの娘は、「はア」と答えたまゝ、ちらりと邦子を見て、その窓際の構内電話の鈴を押して受話器を取りつゝ、

「今お知らせしますから、どうぞ、そちらでお待ちになつて下さい」

と、告げる口許の濃い紅が邦子の眼に浸みた。

二

邦子の待たされた、その部屋は応接室なのであろう、幾組か板戸の衝立で仕切られた蔭に、同じような卓子と椅子が置かれ、卓上には商店で使う大きな珠の算盤と会社の名入りの用箋が揃い、安ものゝ青磁色の灰皿が載せてあつた。

邦子は、かたくなつて、その脚の高い椅子にかしこまつていた。

暫くすると、コト／＼と靴の音が近付き、扉が開き、「いつたい、どうしたんだい？」

信也が、のつけから、こう声をかけて現れた。家を出る時の身支度と違つて、技師の作業服に着更えていた。

「あら、此処じやそんななりしていらつしやるの？」

邦子が、少しがっかりしたように――

「莫迦、そんな事はどうでもいい、それよりなんだつて、こんな処へやつて来るんだい、驚いたぜ」

信也は、向い合せの椅子に斜に腰かけた。

「だつて、電報が来たんですもの！」

女だてらに、此処へ駆けつけねばならなかつた理由を、まづ明かにした。

「莫迦ッ」

その頭の上に、信也の大きな声が爆発した。邦子は何故そんなに、どなられるのかと、吃驚すると、続けざまに、

「おい、莫迦もたいていにして置け、人が甘い顔をしたと思つたら、又もやのこ／＼此処までやつて来る奴がいるかい、人に知れたら恥を掻くぜ――呆れたなあ」

信也は、およそ、まったく呆れ返つて、ものも言えぬとばかり、眉を蹙めた。

「あら、どうして、何が私そんなに悪いの？ そりやあ私だつて工場まで来たくはないわ、だけど、何しろ外の事とは違

つて、大事件でしょう、電話かけようと思つたんですけど、塞がつてるし、愚図々々して遅くなるといけないと思つて、第一、加代さんにも悪いし——」

邦子は一生懸命で張り切つて出かけて来た矢先だけに、信也の態度におろ／＼して声さえふるえた。

「いつたい、なんなんだ、なんて電報が行つたんだ」

信也は、ハテナ——とせき込んだ。邦子は、手提を開けて、電報を出して、

「貴方、民郎さんが亡くなつたんですつて！」

「なに？!!」

信也も顔色を変えた。そして電文を見詰まつ——

「こりやあ、どうしても、僕がまず行かなくちやならないなあ」

「えゝ、だから、私慌てゝ来たのよ、どうせ行くのなら、少しでも早い方が、向うも有難いと思つて、——まるで他人ばかりの炭坑の杜宅のなかなんですもの、加代さんだつて、どんなに心細いか——」

「うん、都合のいい汽車があれば、今からでも、すぐ立とう、それがいいだろう」

「えゝ、そうしてあげて頂戴、私も、そう思つて、それ、ここにお支度揃えて持つて来といたわ」

と、邦子は一寸自慢げに、椅子の下の鞆を指さした。

「そうか、それは大手柄だつたな、それじゃ時間表出して呉れ、汽車を見なけりやあ」

信也が、手をのばして、鞆を引き上げると、

「あら、私困つたわ、どうしましょう。時間表入れて来なかつたわ。ちゃんと安全剃刀まで用意したんだけど——」

邦子は可愛く困つた顔をした。

「ハ、ハ、ハ、君のこつた、おおかたそんなこつたらう、よし、事務所にはあるだろう」

信也は、でも小言も言わず、笑つて出て行つた。

三

「一時半の柩——それにしよう、まだ時間はあるな——で、留守はいつものように睦ちゃんか」

信也は汽車の時間表を、めくりながら戻つて来て言つた。

睦ちゃんとは、邦子の実家の妹だつた。

「えゝ、大丈夫よ、睦子呼びますから——やはり此処からお立ちになる？」

「うん、そうする、今日は香料入りの石鹼原料の試験中だから、もう一二時間僕はいなくちやならないんだ」

「そう、じゃあ私、あとでその時間までに、東京駅へ行つてますわ」

「そうだなあ、その方がいゝだろう、鞆も来てるんだし」

「あの服も茶の靴も持つて来ましたわ、ワイシャツも二つだけ入れて——今朝のいらぬ服や靴、私すぐ持つて帰つて置きますよ」

「そうだな、そうするか」